

東真国に関する総合的検討

井黒 忍（京都大学文学部研修員）

はじめに - 金代東北アジア史研究における問題の所在

I. 『金史』世紀に見える諸問題

『金史』巻一「世紀」には、始祖に始まる族長十人の事跡を記載。太祖完顔阿骨打による金朝建設の前段階として、東北アジアにおける完顔氏を中核とする女真族の統合のエピソードが綴られる。主に黒竜江以南全域を舞台として、完顔部内部における主導権を巡る葛藤、敵対勢力との抗争を通して女真族の大統合が実現。しかしながら、「世紀」の記述には従来より様々な問題点が指摘される。

1. 完顔氏始祖函普の出自問題。

「金之始祖諱函普、初從高麗來、年已六十餘矣。」

→函普の出自を高麗とする見解

→函普の出自を高句麗とする見解

2. 始祖三兄弟に関わる問題。

「兄阿古迺好佛、留高麗不肯從、……始祖居完顔部僕幹水之涯、保活里居耶懶。」

→兄阿古迺の子孫は、遼東半島を中心とする地域（曷蘇館）に居住し、遼朝の戸籍に編入された熟女真。

→弟保活里の子孫は、耶懶路に居住。『金史』中においては「宗室」と表記。

3. 渤海との関連性。

「及太祖敗遼兵于境上、獲耶律謝十、乃使梁福・幹答刺、招諭渤海人曰「女直、渤海本同一家。」

→渤海との共通性を完顔部側が強調。渤海人勢力は完顔氏宗室との婚姻関係を通じて政権中枢にかかわっていく。

皇室完顔氏および女真族の民族性。

・文献史料の不足

1153年（貞元元年）、四代皇帝海陵王による上京會寧府（黒竜江省哈爾濱南郊阿城）より中都への遷都が実行。以降は華北地域を中心とした記事が大半をしめる。中でも女真族の中原への集団移動、それに伴う「漢化」などの事例は、正史以外の文集等においても頻見。反面、東北地域への移動、及び当該地域における具体的行動はほとんど記載されない。

正史を代表とする編纂史料の一般的性格として、戦時或いは有事における記載は極めて詳細。しかしながら、平時における状況には無関心。

・華北地域行政システムとの相違

祖宗興隆の地たる東北地域に対する統治形態は、華北におけるものとは異なり、従来の猛安・謀克と中心とした民政・軍事の一体化したシステムを温存。華北地域における「路」とは、複数の州県の上位に位置する軍事・監察の大区画。東北地域においては、上京・咸平・東京路を除く他路には州県が存在せず、中区画としての「路」が存在。

Ex. 蒲輿路・合懶路・恤品路・曷蘇館路・胡里改路

・金朝滅亡後の女真族の動向

金代以降、元代・明初における東北アジア地域の具体的状況を記す文献史料は極めて稀少。明代中期以降に関しては、衛所制および李朝・明朝との関係を通して女直史研究が進展。清朝興隆への前段階としての意味づけ。但し、その中間たる金代および元代の諸事象の解明がなされないままの女直史研究は、女真族と満州族との関係などの方面に大きなブランクを残す。

金・元代における東北アジア研究は、女真・満州をつなぐミッシングリング。

1, 東真国概論

[蒲鮮萬奴の自立と大真国の成立]

咸平府を根拠として遼東に自立した契丹人勢力耶律留哥征討のため、遼東宣撫使として派遣された蒲鮮萬奴は留哥との戦闘敗退後、自らも遼東の地において自立。1215年に自ら天王と稱し、国号を大真、年号を天泰と定める。遼東における女真人勢力（猛安・謀克）を糾合し、遼東の地を巡り耶律留哥および金朝軍団との熾烈な戦闘を繰り広げる。

[モンゴル帝国との連携]

婆速路・上京攻撃の失敗の後、遼東より朝鮮半島東北部へ移動。1218年前後にモンゴル帝国に降り、男子帖哥を質子として送る。後に帖哥はケシクの一員として、遼東、陝西方面における戦闘に参加。さらに1218年12月、東真国元帥完顔子淵は二万の兵を率いてモンゴル帝国元帥哈真とともに鴨緑江方面にあった契丹勢力を攻撃。モンゴル・東真の連合軍に高麗軍が加わり、三者の連携のもと契丹人勢力を撃破し江東城を陥落させる。

[モンゴル軍侵攻による滅亡]

『元史』の記載によれば、太宗オゴデイの五年（1233）グユクを主将とするモンゴル軍の攻撃の前に、蒲鮮萬奴は捕獲され、東真国は滅亡。しかしながら、『高麗史』中には1233年以降においても東真国の東北面への侵攻に関する記載が頻見。こうした動きは、残存勢力の個別的な高麗への侵略行為とも考えられるが、吉林省にて出土した官印には文献史料中には確認できない大同年間の紀年を有するものがあり、蒲鮮萬奴投降後の東真国の年号とみなす見解も存在。なお、王国維は『黒韃事略箋證』中において、萬奴投降後の東真国がモンゴル帝国によって藩国の如き扱いを受けた可能性を指摘する。

[東真国研究の意義]

いずれも断片的な史料とは言え、金・モンゴル・高麗・南宋、さらにペルシア語史料中に

蒲鮮萬奴の東真国に関する記載が見られる。(問題Ⅱ) 様々な情報レベルに基づくこれら文献史料に加えて、出土文字資料たる官印に関しても現段階において既に東真期の遺物が相当数報告される。(問題Ⅲ) こうした文献史料、出土文字資料の状況に加えて、東真国の根拠地である図們江・綏芬河流域における遺跡・遺物等の検討分析を行うことで事実関係を総合的に考察することが可能となる。(問題Ⅰ) さらにそこから得られた知見は前代・後代における断片的史料を検討する上で確固たる基礎となり得る。(問題Ⅳ)

2, モンゴル帝国初期における地方政権のあり方

・モンゴル軍中における東真軍団の役割

1218年、蒲鮮萬奴のモンゴルへの投降と帖哥の入質。遼東に拠る契丹人勢力に対して共同で出兵。

『高麗史』巻22 高宗世家

(高宗五年、1218) 十二月己亥朔、蒙古元帥哈眞及扎剌率兵一萬與東眞萬奴所遣完顔子淵兵二萬聲言討丹賊、攻和・猛・順・徳四城、破之、直指江東城。

(高宗六年) 二月己未、哈眞等還、以東眞官人及僉從四十一人留義州、曰「爾等習高麗語、以待吾復來。」

東真国軍としてモンゴル軍団との明らかな区別が存在するものの、哈眞帰還の際に高麗語習得に関して発せられた言葉からは、東真国官人に対する指揮権を有した可能性も考えられる。

さらに興味深い記載として、李齊賢『益齋亂藁』に以下の記述が見える。

『益齋亂藁』巻6、「門下侍郎平章政事判吏部事贈威烈公金公行軍記」

己卯(1218)年二月、公(金就礪)與知兵馬使韓光衍領十將軍兵及神騎大角内廂精兵往焉。哈眞使通事趙仲祥語公曰「果與我結好、當先遙禮蒙古皇帝、次則禮萬奴皇帝。」萬奴者、蓋東眞之主也。公曰「天無二日、民無二王。天下安有二帝耶。」於是、只拜聖武、不拜萬奴。

同文が『高麗史』巻103、金就礪伝にも見える。東真政権に対しての配慮を必要とするとは考えにくい時期に作られた上記史料の意味するところは？

・帖哥の軌跡

蒲鮮萬奴投降に際して質子としてモンゴルに送られた長子帖哥は、ケシクに編入されテゲ・コルチと称され、モンゴル軍の高麗攻撃および陝西方面において活躍。(松田 1992) 彼のもとに配備された女真軍団の動きを詳細に追うことでモンゴル帝国における女真族の軍事面での役割を考察。

・日本遠征およびナヤンの乱における女真軍団

従来よりクビライ時代の日本遠征における女真軍団の投入が指摘されるが、これら女真軍団の有する来歴出自に関しては未詳。さらに、クビライ政権を揺るがしたナヤンの乱、これに続くカダアンら諸王の反乱にも東北地域における女真族が大きく関与したと考えられる。元代における女真族の動向を再検討。

3, 官印資料から見た東真国

・金代官印に関わる規定

『金史』巻58 百官志 印制

職官	方(寸=4.3 cm、高1996)／重	その他
三師・三公・親王・尚書令	二寸／八十兩	駝紐
一字王	一寸七分半／四十兩	金鍍銀／鍍金三字
諸郡王・東宮三師・宰相執政	一寸六分半／三十五兩	金鍍銀／鍍金三字
国公	無印	
一品	一寸六分半／三十五兩	金鍍銀／鍍金三字
二品	一寸六分／二十六兩	金鍍銅
三品	一寸五分半／二十四兩	銅
四品	一寸五分／二十兩	銅
五品	一寸四分／二十兩	銅
六品	一寸三分／十六兩	銅
七品	一寸二分／十六兩	銅
八品	一寸一分半／十四兩	銅
九品	一寸一分／十四兩	銅
朱記	一寸／十四兩	銅

・天泰年間・大同年間

蒲鮮萬奴は金朝からの自立に伴い、国号を大真、年号を天泰と定める。天泰年間の紀年を有する官印は、黒竜江・吉林の両省において出土。謀克印に加えて萬戸、行軍萬戸等の軍事関連官職、さらに引進使、吏部主事等の官職が見える。現在確認しうる年代は天泰二年より九年。

文献史料中においては、東真国における改元の記載は見られない。但し、出土資料中には大同の年号が記された官印が存在。これら官印資料には大同二年より十年に亘る紀年が刻され、天泰年間と合わせて都合十九年間（1214～1233）の東真国存立期間内に製造されたものと考えられる。

しかしながら、僅か二点のみではあるが、天泰九年以降の紀年を有する官印が存在。吉林省柳河県凉水河鎮出土「軍政之印」（天泰十四年）、黒竜江省寧安県城子後古城出土「不甸古阿隣謀克之印」（天泰十八年）。これをもとに天泰年間を十九年間とし、大同年間を蒲鮮萬奴投降後の残存勢力によって使用された年号とする見解が存在。

・東真期官印の分布

天泰・大同年間の紀年を有する官印を出土地点における遺跡との関連から再検討。天泰年間に関しては吉林省および黒竜江省に見られるが、大同年間に関しては主に曷蘭速瀕路にほぼ限定される。東真国の境域を考察する上で大きな意味を持つ。さらに、出土遺跡（特に城址）の平面プランとの比較検討により、製造地点との関係、謀克寨の規模などの検証を行うことが可能となると考え得る。ちなみに、黒竜江省における城址の規模と行政単位との関係を以下の様に規定する見解も存在。（王1988、王1993）

四周 (m)	行政単位
>7500	京城
4000～5000 (3000～5000)	路所在地の州府城
2500～3500	州城
1500～2500	県城、猛安
1000～1750 (1000～1500)	謀克
400 ～750 (400～500)	辺堡

4、開元城・南京城の再検討

・開元城・南京城の位置

遼東・上京での敗戦の後、蒲鮮萬奴は東遷し開元城・南京城を根拠地として勢力を保有。この両者の位置をめぐってはモンゴル軍の満州経略の観点から論争が展開。さらに元代行政区画としての開元路の疆域に関しても多様な見解が見られる。開元の位置に関する朴 1995の整理によれば、

- 1, 東真南京（吉林省延吉市附近）附近の一般名称
- 2, 金上京會寧府址（黒竜江省阿城）
- 3, 黒竜江省依蘭
- 4, 黒竜江省寧安県城子後古城
- 5, 渤海上京龍泉府址（黒竜江省東京城）
- 6, ロシア共和国ウスリースク双城子
- 7, ロシア共和国クラスノヤロフ山城
- 8, 吉林省琿春以東
- 9, 黒竜江省東寧県内
- 10, 黒竜江省東寧県大城子古城

これらの見解を大まかに分けると

- I、松花江流域 (2, 3)
- II、牡丹江流域 (2, 4, 5)
- III、図們江流域 (1, 8)
- IV、綏芬河流域 (6, 7, 9, 10)

蒲鮮萬奴は自立当初、遼東の地をめぐり耶律留哥と戦闘。敗戦の後、上京に向かうも金朝軍により撃退され、曷蘭速瀕路を目指す。この一連の動きが女真族の統合をねらいとするものであるとすれば、中心都市たる開元・南京の両城は曷蘭速瀕路に置かれたと考えられる。

また、こうした見解の相違を生み出す原因としては、元代になされた二度にわたる開元路治の移動が挙げられる。(東真国首都／開元萬戸府→三姓→咸平府北) 元代における開元路治の変遷は、単なる官衙、官僚の移動に止まるものではなく、管轄地域下にあった女真集団を伴う集団移住であった可能性がある。これには遼朝による渤海国覆滅後の渤海人遷徙が集団単位で地名を伴って移動したことなどの先例あり。曷蘭速瀕路における女真勢力の再興を防ぐため、遙か北方の依蘭の地、さらには咸平府北部に移されたのではないかと。

また南京城に関しては、製造地として「南京」の記載を持つ官印資料が出土。これにより吉林省延吉市城子山山城に比定される。また、出土官印資料中に「北京行部」の記載が見える。北京を開元と同一視する見解も存在するが、「行部」と記される以上、首都に置かれた六部の出先と考える方が妥当。さらに遼・金時代を通して、東西南北の名を冠した京城は常に陪都としての意味を有する。東真国の統治システムが金朝との継承関係を有する以上、北京をもって開元と同一視する見解には疑問。

・元明史料中に見える駅と交通路

『析津志輯佚』天下站名、『永樂大典』所収『站赤』、『遼東志』等の記載により、元明期の驛站ルートを再現。(箭内 1913、和田 1930 等)

上記各資料中に記される驛站ルートにおいては、西方の上京會寧府とならび東満州における各ルートが開元城を起点として叙述。上記史料中には記載されない上京と開元を結ぶルート、東京と開元を結ぶルート。また牡丹江流域を経由して依蘭とリンク。

『金史』卷二十四 地理志 上京路

會寧府……東至胡里改六百三十里、西至肇州五百五十里、北至蒲與路七百里、東南至恤品路一千六百里、至曷懶路一千八百里。

恤品路……西北至上京一千五百七十里、東北至胡里改一千一百、西南至合懶一千二百、北至邊界幹可阿憐千戸二千里。

・東真期の辺牆

考古調査により吉林省内において、辺牆址とみられる遺址が発見。その建設時代をめぐって渤海期、或いは東真期とする見解。

吉林省延吉市和龍県土山郷東山村二道溝→(東北)→和龍西城→龍門郷・延吉細鱗河・銅佛・八道郷の境→双風村→(東折)→烟集→長安郷磨盤山上：全長 150 km

5、曷蘭速頻地域研究の意義

・金朝勃興期における諸問題の解明

完顔氏の始祖函普の弟保活里は耶懶路に居住し、その四世の子孫直何海は景祖烏古廼に使者を送り再び宗系を通じんことを求める。景祖烏古廼とは周囲の諸部、白山・耶侮・統門・耶懶・土骨論・五国等の勢力を武力を用いて服属させ、遼朝から初めて生女直部節度使を授けられた完顔部部長。但し、遼の戸籍に編入されることを拒絶し、完顔部の自立性を内外にアピールする。耶懶路に初めて完顔部の勢力が及んだ景祖期に耶懶路によった集団が自らを宗室の一員として、完顔部に接近。後にこの集団は対遼、対高麗戦において目覚ましい活躍。

・上京・東京・曷蘭速頻

遼東半島に居住した熟女真と呼ばれる集団は早くから遼朝の戸籍に編入され、先進的な文化を保有。彼らは「高麗」に残った始祖の長兄阿古廼の子孫として、『金史』宗室伝に名を連ねる。

これに対して、耶懶路によった集団もまた始祖の末弟保活里の子孫として、完顔部中においても特別な扱いを受ける。中でも石土門、迪古乃(完顔忠)の兄弟は耶懶路完顔部部長を

継承し、当該地域における勢力を維持。

『金史』巻70 完顔忠伝

太祖入燕京、迪古乃出德勝口、以代石土門爲耶懶路都亭。天會二年、以耶懶地薄斥鹵、遷其部於蘇濱水、仍以朮實勒之田益之。

天會二年（1124）耶懶路完顔部集団は蘇濱水、すなわち綏芬河流域に移住。ウスリースクにおける完顔忠神道碑の存在。

完顔部興隆の地としての上京會寧府、長兄阿古廼の子孫が居住する東京を中心とした遼陽平原、末弟保活里の子孫が居住する曷蘭速瀨地域。この三地域こそが完顔部の中核。

・女真族居住地としての認識の形成

曷蘭速瀨の地は後世において女真族居住の地として認識される。明代以降の地図中においては、三方（東：シホテ・アリニ山脈、北：老爺嶺山脈、南：長白山脈）を山、残る一方を海で囲まれた特徴的なこの地域に「女真」、「女直」の記載がなされる。実際には、東北アジアの広い地域に居住したであろう女真族に関して、限定された形で当該箇所にその名が記された直接の要因としては、建州女直の存在が考えられる。さらに建州女直を母体として勃興する愛新覺羅氏ヌルハチの祖先を金朝始祖の末弟保活里であるとする伝承が存在。「混一疆理歴代国都之図」の記載に関しては、さらに検討を要する。

- 1, 両儀玄覽図【萬曆三十一年（1603）刻。『坤輿万国全図』を底本に作製。】
- 2, 坤輿万国全図【マテオ・リッチ作図（萬曆三十年；1602）を基に萬曆三十年（1602）作製。】
- 3, 楊子器跋輿地圖（摸絵本）【末尾題「嘉靖五年（1526）歲次丙戌春二月吉日」】
- 4, 王泮識輿地圖（模絵増補本）【萬曆二十二年（1594）刊本、萬曆三十一年（1603）～天啓六年（1626）模絵増補。】

・水系から見た女真部族集団

『金史』世紀の根本史料となった『祖宗実録』は、穆宗の第五子昖（烏野）を中心として古老の語りを採集し編纂された。編纂に際して各集団の記述法として以下の方法が用いられた。

『金史』巻66 昖伝

凡部族、既曰某部、復曰某水之某、又曰某郷某村、以別識之。

各集団を認識するに際しては、水系の別が用いられた。こうした事例は実際に「世紀」中においても頻見。（Ex. 斡民水蒲察部、統門水温迪痕部、蘇濱水烏古論敵古徳）女真集団の考察には水系を中心とする必要があり。中でも統門水（図們江）、蘇濱水（綏芬河）流域には完顔部に敵対する強力な集団が居住し、穆宗盈歌・康宗烏雅束との度重なる戦闘を繰り広げた。なお「世紀」中においては当該時期において初めて「城」の記載が現れる。女真部族集団の特性を考察する上で各河川流域における集落・城跡分布を検討。

・双城子に関して

綏芬河流域に着目。中流湾曲部に位置する速瀨路（渤海時代の率賓府）は清代地図中においても城郭を確認。一貫して当該流域中の重要都市としての役割を果たしたことを示すもの。

- 1, ダンヴィル「シナ新地図帳」（Nouvel Atlas de la Chine）【康熙朝における「皇輿

全覧図」作成にあたったフランスイエズス会士の稿本をもとに作成（1737）】

双城子……“Fourdan Hotun”（furdan は満州語で「関」、hoton は「城」）

双城子西北の城郭……“Tchoulgué Hotun”（Tchoulgué は julgei 「古い」の意味か？）

2, 「盛京吉林黒竜江等處標注戦蹟輿図」【乾隆四十一年六月十八日上諭、同四十三年閏六月御製序】

双城子……富爾丹城；furdan hoton

太祖高皇帝庚戌年（1610）征窩集部、招降尼瑪察諸路長。

Taizu dergi hūwangdi , šanyan indahūn aniya , waji aiman be gailara de
nimaca i geren golo i dalaha niyalma be elbime dahabuha.

双城子西北……古城；julgei hoton

* 普通名詞としての富爾丹城、古城。

3, パラディウスの書簡中における記載【第十五次北京伝道団団長パラディウスの1870-71における南ウスリー踏査報告】（井上1991）

1870年9月15日付《ニコリスコエ村》発の第2書簡

……綏芬河のこちら側の氾濫原には、渤海起源と思われる古代の町（フルダン・チェン〔霍爾旦城〕の廃墟、またこと町からやや距離を置いて、女真の集落址である広大なゴロデシチェがあります。女真に囚われの身となって満州の奥地に幽閉された、宋王朝の件の統治者の名が刻まれた貨幣が、この地で多数見出される事実は、古代《五国部》の所在が遠からぬことを推測させますが、これについてここで長広舌を揮うのは時期尚早と考えます。歴史に記載されているシュアン・チェン〔双城〕が、今日のシュアン・チェン（ニコリスコエ村近くの町と小村。双子の町を意味します）に他ならないと想定する根拠を私は持っています。モンゴル支配の時に、モンゴルに投降した朝鮮人の居留団がこの地に住みつきました。……

・後背地としての沿海州……沿海州における東真期遺跡の分布

6, 女真族の天王信仰

・蒲鮮萬奴の自称した「天王」とは？

元代至元年間に編纂された『類編長安志』巻8、辨惑に以下の記述が見える。

百家神、本北極神。新説曰「咸寧縣鳴犢鎮風涼原上有百家神廟。其像眞武。」金初、陝西東路立五十四猛安千戸、鎮防軍寨。以鎮西川五十四州、每一寨前、必立眞武或天王像。

以壯軍威、爲北極神廟、語訛爲百家神。

華北各地に移動した女真集団は、猛安・謀克を単位として寨と呼ばれる居住地を建設。各寨にては軍神としての北極神を祀り、眞武像・天王像を安置する。蒲鮮萬奴のもとには、自立の当初より多数の猛安・謀克が来投したが、彼らが軍神として信仰する「天王」を自称することで、各地に分散した女真族を再統合するというねらい。

北極神、天王信仰の宗教的来歴として、東北アジアに広く見られるシャーマニズムとの関係、或いは四天王の一員として仏教との関連が考えられる。中でも渤海の故地に勢力基盤を有した東真国における仏教の影響は、渤海以来の伝統と密接に関わるものであり、宗教関連遺跡等の検討が必要。

・国号の問題

蒲鮮萬奴の国号に関しては、従来より「大真」、「東真」、「東夏」をめぐって論争。萬奴の自称した「天王」が女真族の再統合を目的とすると考えれば、「大女真」を意味する「大真」こそ最もふさわしい国号と言える。「東真」は他称。また、『元史』には蒲鮮萬奴をもって「完顔萬奴」と記す記載が存在。金朝の正式な後継者としてのアピール。Cf.『集史』の記載。

7. 研究計画

- ・ロシア共和国沿海州における出土官印調査
- ・東北三省及び沿海州出土官印データベースの構築→出土地点とのリンク
- ・図們江・綏芬河・アムール・ウスリー流域における遺跡・出土文字資料の分布
- ・高麗関係史料を用いた東真史の再構成
- ・19世紀ロシア人による満州の探検と調査

参考文献

【文献史料編】（一部初出を省略）

- 池内宏「金末の満州」(『満鮮史研究』中世第一冊、岡書院、1933)
- 池内宏「蒲鮮萬奴の国号について」(『満鮮史研究』中世第一冊、岡書院、1933)
- 池内宏「元代の地名開元の沿革」(『満鮮史研究』中世第一冊、岡書院、1933)
- 池内宏「蒲鮮萬奴の国号に関する問題の再検討」(『満鮮史研究』中世第三冊、吉川弘文館、1963)
- 池内宏「蒙古の高麗征伐」(『満鮮史研究』中世第三冊、吉川弘文館、1963)
- 石田幹之助「満州に関するロシアの名著」(『欧米に於ける支那研究』創元社、1942)
- 石堂清倫「在北京ロシア伝道団の業績」(『書香』132、1941)
- 井上紘一「パラディウスの南ウスリー踏査記―翻訳と解説―」(畑中幸子；原山煌編『東北アジアの歴史と社会』(名古屋大学出版会、1991)
- 岩井大慧「蒲鮮萬奴国号考」(『東洋学報』19-4、1932)
- 古松崇志「女真開国伝説の形成―『金史』世紀の研究」(『平成10年度～14年度 文部科学省科学研究費補助金 特定領域研究(A)118「古典学の再構築」研究成果報告集V A04「古典の世界像」班研究報告』、2003)
- 松田孝一「モンゴル帝国東部国境の探馬赤軍団」(『内陸アジア史研究』7・8合併号、1992)
- 三田村泰助「清朝の開国伝説とその世系」(『清朝前史の研究』東洋史研究叢刊之十四、東洋史研究会、1938)
- 箭内互「東真国の疆域」(『満州歴史地理』第貳卷、1913)
- 箭内互「満州に於ける元の疆域」(『満州歴史地理』第貳卷、1913)
- 箭内互「元明時代の満州交通路」(『満州歴史地理』第貳卷、1913)
- 箭内互「蒙古の高麗経略」(『蒙古史研究』刀江書院、1930)
- 箭内互「成吉思汗の満州経略に関する二三の研究」(『蒙古史研究』刀江書院、1930)
- 和田清「元代の開元路について」(『東亜史研究』満州篇、東洋文庫、1955)
- 和田清「開元・古州及び毛憐」(『東亜史研究』満州篇、東洋文庫、1955)
- 譚其驤「元代的水達達路和開元路」(『歴史地理』創刊号、1981)
- 景愛「三説金末蒲鮮萬奴東夏国的都城―答朴真爽同志」(『延辺大学学報』1984-4)
- 李健才「關於東夏幾個問題的探討」(『民族研究』1985-3)
- 朴真爽『東夏史研究』(延辺大学出版社、1995)
- 王慎榮；趙鳴岐『東夏史』(天津古籍出版社、1990)

王慎榮「十三世紀蒙古和東夏的關係」(『史學集刊』1987-4)
張博泉「開元城史地考略」(『史學集刊』1983-3)
張紹維；李蓮「東夏年號的研究」(『史學集刊』1983-3)
趙鳴岐「東夏國都城上京開元考」(『社會科學戰線』1985-3)

【考古資料編】

鮑海春；王禹浪主編『金源文物圖集』哈爾濱出版社、2001
陳相偉「考古學上所見東夏國文化遺存」(李澍田主編『東疆研究論集』長白叢書研究系列之十二、吉林文史出版社、1995)
譚士「記吉林農安出土金“會州勸農”官印」(『考古』1961-6)
樊萬象「東夏國“古州”之探討」(『遼金契丹女真史研究』1984-3.4)
樊萬象「“古州之印”與地望」(『北方文物』1985-3)
樊萬象；李倫冠「論東夏古州及其相關問題」(『中國考古集成』東北卷、金(二)、北京出版社、1996)
高青山「金代尺度試探」(『中國考古集成』東北卷、金(一)、北京出版社、1996)
郭毅生「率賓府、恤品路和開元城」(『中國考古集成』東北卷、金(二)、北京出版社、1996)
華泉「完顏忠墓神道碑與金代的恤品路」(『文物』1976-4)
景愛編『金代官印集』文物出版社、1991
朴潤武「一方東夏國的銅印」(『中國文物報』第8期、1990年3月1日)
李景冰「吉林省鎮賚縣出土東夏官印」(『考古』1993-7)
李正鳳「琿春裴優城又出土三顆印」(『延邊文物資料匯編』)
劉長海「金代上古城非上京城辨析」(『北方文物』1993-4)
劉長海；王清民「東夏國“北京勸農使印”考述」(『考古』1996-11)
劉長海「東夏國北京位置的再探討」(『遼海文物學刊』1997-1)
王永祥；王宏北「金代黑龍江古城述略」(『遼海文物學刊』1988-2)
王禹浪『金代黑龍江述略』(遠東文庫龍江史地叢書之一、哈爾濱出版社、1993)
王健群「東夏的官印和銅鏡」(『社會科學戰線』1980-2)
王錦厚；郭守信主編『遼海印信圖錄』遼海出版社、2000
許玉林「東夏國的銅官印」(『遼金契丹女真史研究』1984-2)
友之「吉林省東部延邊地區發現古長城」(『遼金契丹女真史研究』1985-1)
張紹維「東夏官印集攷」(『博物館研究』1983-3)
張紹維「延邊地區東夏邊牆」(『中國考古學年鑑』文物出版社、1986)
張泰湘「試論元初開元城的位置」(『學習與探索』1982-1)
張泰湘；柳成棟「豬兒年“副統之印”考略」(『北方文物』1985-3)
張英；朴太元「吉林琿春縣出土東夏銅砮碼」(『考古』1987-2)
張英；仁萬舉；羅顯清『吉林出土古代官印』文物出版社、1992
鄒晗；柳雪「東夏國“速伯昆山謀克之印”與女真文款識考辨」(『遼海文物學刊』1990-2)